

大濱信泉プロジェクト『勇気づけの教育』の推進 (36)



～ 誕生日 ～

大庭学園立新栄町こども園 園長 吉濱 剛

こども園では、毎月お誕生会を行います。誕生月の子どもは指折り数えてその日が来るのを待っていて、当日は朝からウキウキしています。お誕生日会は、かわいらしく着飾った主役の誕生児が大きな拍手で迎えられながら入場し、一人一人の名前が呼ばれます。次にバースデイソングをみんなで歌い、辺りを暗くして成長した年齢と同じ数のロウソクを身体いっぱい力で吹き消します。

その後、誕生児は、緊張と喜びの中で「お名前は?」「何才になった?」「大きくなったら何になりたい?」等の質問に答えていきます。まさに、その日のシンデレラボーイ、シンデレラガールです。

子どもは、祝福されることで1つ成長した喜びと1つお兄ちゃんお姉ちゃんになった誇りを実感し、自己肯定感が高まっていきます。このように、お誕生日会は子どもにとって成長の証を味わう機会であり、1年1年毎にたくましく成長した節を刻んでいきます。

誕生日は、大人になった今でも、家族に祝ってもらったり、友人からメールやSNS等で祝福のメッセージをいただいたりして、喜びとともに自己存在を再確認することができます。まさに、自己肯定感が高まる最も身近で貴重なセレモニーとなります。

ところで、今まさに人生100年時代を迎えようとしています。おかげさまで、私の母は今年1月10日で満100才となりました。まさか母が先頭きって100才を迎えるとは想像できませんでした。最近、転んだケガで一時入院はしたものの、80才を超えてから病気で通院することもほとんどありませんでした。しかし、寄る年波には抗(あらが)うことはできず、弱々しく小さくなってきた母親を見るにつれ、ここに至るまでの苦勞と返しきれないほどの恩愛を思い出し、感謝の念に耐えません。

若い頃は、よく親に反発したり反抗的態度を取ったりすることもあります。自分が親になった瞬間、心のスイッチが切り替わり、わが子を愛おしく思うと同時にこれまで自分を育ててくれた親の愛情と感謝の気持ちでいっぱいになります。

母と私のエピソードを振り返ってみると、私は兄弟6名の5番目で生を受け、中々構ってもらえることも少なかった。病氣や大きな怪我をすると、そのときだけは母親を一人占めにできたという記憶が鮮明に残っています。

我が家では、その当時病氣をすると、母が「かちゅー湯」(鰹だしに醤油を掛けたスープ)か、豚肉と根菜類、にんにくを煮込んだスープを作ってくれました。病院の帰りに、おそば屋さんに寄ってそばを食べさせてもらったことが、兄弟が多い中で、唯一母をひとりじめし、全身で温もりを感じることができた贅沢な時間でした。当然、病氣になると身体はきついのですが、その間は母にめいっぱい甘えることができたので、最も安心できる時間であり幸せな時間でもありました。それ以外でも、母は私が辛いときは、いつでも励まし信じていてくれました。

25才の誕生日を迎えた日に、ふと母親に電話しました。「母ちゃん、今日は何の日か分かるかな」「忘れるわけないでしょ。誕生日でしょ」「母ちゃん、僕を産んでくれてありがとう」。母の明るい声を聞きながら素直に感謝の気持ちが湧き出てきました。それ以後、誕生日は、母親へ感謝を伝える日となりました。

時が経ち、母が年老いてくると、電話しても「今日は何の日だったかねえ」とか「あんたは誰ねえ」と少し寂しくなる返事がくるようになりましたが、母と私の誕生日の年中行事は今も続いています。

(今では電話で通訳が必要になってきていますが…。)

最後に、子どもにとって誕生日は、プレゼントをもらったりする大きな楽しみもありますが、もっと大切なことは、自分が生まれてきたことを心から祝ってもらうことで自己存在を再確認し、これまでの成長や明日からの希望を抱くことができることではないでしょうか。同時に、誕生日は、親や家族、周りへの感謝の気持ちが育つ日でもあります。心を込めて、Happy Birthday to you.